或るじん肺患者の述懐

荒尾市民病院（荒尾市荒尾二六〇〇番地）の新病棟（筋鉄三階建）の二階、七百十七号室で三人のじん肺患者が暮らしている。

南側に窓の開いた明るい病室だが、白いベッドの上に体を休めたり、上半身を起こして座ったりしながら、くる日くる日を生きている。一度見舞われた以上、も早や絶対に治る道のないじん肺病。いつの日か息をひきとるまで、この病室こそわが家として生きることを運命づけられた人びとだ。そのなかの一人に、かって四山鉱の掘進工として、まっ暗な地底で坑道掘削に汗を流していた井上忠光さんがいる。

井上さんは大正九年一月二十九日の生れだから、今年五十六歳。住まいは、荒尾市民病院のすぐ近く。荒尾市荒尾二三九七番地の一。長く住んできた社宅をひき払い、新築のこの家に二年ばかり前移り住んだ。（といっても、月に一回だけ許されて外泊するばかりなのだが）

以下の文は、とある日井上さんが語った恐ろしい、そして悔い多い体験談である。

くる日もくる日も、静養の井上忠光さん。

悔やんでも遅かった

不意の宣告「管理四」

私が四山鉱に坑内掘進工として入社してから八年目――昭和三十年十二月に行なわれた労働省検診で「管理四」（最重症度）の烙印を押されたんです。

女房（つる子さん。大正十年生れで五十五歳）と結婚してたった九年目のことで、すでに好子、修、由紀子と三人の子どもがありましたから、「まさか」と思っていた「管理四」という、重いじん肺に冒されていることを知ったときのショックは、とても言葉にいい現わすことはできません。

なし泣くとか

といいましても、ことの次第を告げられたのはそれからちょうど一年目の、三十一年十二月のことで、知らぬが仏、それまで私は相も変らず四山鉱の坑底でじゃんじゃん働きつづけていたのです。

その日、私は腰痛に勝てず仕事を休み、家で静養していましたから、女房がかわって四山人事にでかけていきました。恐しい宣告をつきつけられるなどとは露知らず、職種変更（その頃井上さんは掘進から運搬にかわっていた）のことくらいに思いこみ、「採炭に希望しとけ」といってやったほどでした。子どもたちに満足に食わせるにはやっぱり採炭だ、と思っていたときだったので、「これさいわい」と。

ところが女房が、泣き泣き帰ってきたでしょう。

「なし泣きよっとかい」とだずねてもただ泣くばかり。

じん肺といえば、あの頃命が五年間だと相場がきまっていましたし、実際また掘進工だったなかまや先輩たちがごろごろ死によった状態で、それこそ死の宣告を意味していたのですから、女房の口の開くわけがなかったのですよ。

口を開けば涙

女房が事実を打ち明けてくれるまで、ずい分時間がかかりました。

まさに晴天のへキレキ。聞いたとたんに真っ青になり、腰が抜け、足が立たなくなりました。忘れもしません、三十六歳のときのことです。

口を開けば、涙。お互いにただ黙って暮らしました。

もう自分の命は、あとわずか五年。女房と結婚してたった九年で、まさかこんなことになろうとは思いませんでしたね。

余りにも怪率だった自分の過去が悔やまれてなりませんでした。ろくに防じんマスクもかぶらず、思いっきり頭から岩粉をかぶって仕事をして、真っ白になってあがっていた掘進工のあの頃。すべては、後の祭だったわけです。

わが家は病室

「このままじゃどうにもならん。子どもが七つと五つと、それにやっと二つになったばかり。これから学校もある。よし、一日でも長生きすることを考えんなら」

気をとり直すまでの日の長かったこと。

まず女房が入れ替え採用となり私にかわって四山鉱で働くようになりました。私は家にいれば無理するので、返って体に悪いからと、三十四年からいよいよ入院生活にはいったんです。こうしていま荒尾市民病院の二階の病室をわが住み家として、暮らすことになったわけです。

その後の医科学の進歩のおかげで、いまじん肺患者の寿命がいくらか伸びまして、あれから十一年たったいまもまだこうして生きております。それだけもうけました。どきどき起こる発作（セキなど）に苦しむこと、家計の心配をのぞけばとりたてて申し上げることもありません。

ですけど、一番下の子どもなど二十三歳の娘に成長した今日までたった一度も働く父の姿を知らずにきたわけです。これが私の心のなかで最大の悔いとして残っております。悲しいことで残念ですが仕方ありません。

つる子さん談

四山人事で、主人のことを明かされたとき、赤ん坊をおんぶしていた体をささえていることでせいいっぱいでしたが、その日以来心の安まる日は一日とてありませんでした。

主人の体の具合がちょっと悪いと、もうこれでおしまいではなかろうか、死にどませんじゃろか、とおろおろしながら今日まで過ごしてきました。

子どもたちは学校に行くようになりますと、ストだというと大よろこびです。組合がストをうてば私が出勤しなくてすみ、たとえ学校から帰ってもお母さんがいてくれる、というのですよ。

新聞によく親子心中の記事がでますが、その気持がよくわかるので記事を見るたびについ泣いてしまいます。

おかげで、主人の命を守りながら今日までやってこられましたけど、不思議な気さえするのですよ。こんな思いをさせるなんて、むごい会社ですね。

見殺しできぬ現実

じん肺に単独立法を

荒尾市民病院で過ごしているじん肺患者は、井上忠光さんのほか十四人。酸素吸入器を枕元にひきすえている重症の人が二人。

現在三池じん肺会（向井芳雄会長）だけで八十三人の患者が結集し、そのうち入院患者が五十一人。他に不知火けい友会（松本登会長）に加入している患者がおおよそ二百二十人いるといわれる。

三池じん肺会関係だけで、今年二人が死亡。退職後疾患が悪化して、ついに「管理四」取扱い申請に踏みきった人が、三池じん肺だけでも四人。すでに一人が認定され、一人が却下された。あと二人は、まだ通知がきていないが、この頃の特徴は何といっても、認定基準を盾にとっての規制が格段に強まったことだろう。こんなじん肺患者に、政府・独占からの攻撃が労災法改悪を契機にグッと強まるものと思われ、じん肺患者の間から「ぜひ単独立法を」の要求が出ている。じん肺患者のこの現実――、断じて見殺しはできない。

あいつぐ災害に事故

改められぬ生産第一主義

会社側が口にする「保安第一」とはまったくウラハラに、いま三池炭鉱では連日のようにゾッとするような事故・労働災害があい次いでいる。

大きなものとしては、秋吉健一さんの命を奪った宮浦鉱災害があるが、それにひきつづき九月十九日午前十時二十分ごろ、同鉱で、しかも秋吉さんの命をのんだ同じ現場（宮浦鉱第二上層西四十五卸五片坑道）で自然発火が発生した。

五片払跡断層下の観測パイプから白煙がでているのを係員が発見し、観測口から注水することで大事にいたらぬ前にひとまず消化したものの、この事実は坑内に働く者の身のまわりにはあらゆる危険がまちかまえていることをつきつけた。

それから六日目の二十五日にはこんどは三川鉱大斜坑で、コース台車に乗って材料を巻き揚げていた西田国広さんがふり落とされ、左足を切断される事故が発生。

さらに二十八日には、こんどは四山鉱の坑底、五百二十メートル坑道上層五十立入東二片で、空函にケーブルを積みこみ操作中、炭函が逸走。そのため内電員の坂田康博さんと松藤泰憲さんの二人が重軽傷を負った。

あの三川鉱大爆発、三川鉱坑内火災という大災害を二度にわたってひき起こしながら、なお依然として坑内の保安事情は改まらず、このように事故に災害を頻発させている。

三川鉱大爆発以来、生産第一主義・資本の合理化の犠牲となった労働者百八人。重傷を負った身体障害者となれば、なんと一万四千四十五人を数えることになる。恐ろしい事態といわなければならない。

三池労組はいま、反合理化、命を守る闘いを強めるために、全職場にわたって抵抗闘争をひろげようとしている。すでに四山指導部――なかでもその職場一分会（中谷幸夫分会長）など、一歩大きく具体的な活動に足を踏みだしている。

何はともあれ、三池炭鉱の現状を一日も早く改善し、真に労働者が安心して働くことのできる職場に変えなければならない。

四山職場一分会の取り組み

四山指導部職場一分会は、反合理化・命を守るたたかいを強めるために、全員集会―五人組会議―全員集会を開き討論の末、次のようなことを意志統一した。

「保安上の学習会を定着する」「三役会議、組会議を充実させる」「職場新聞の発行」「高温職場に配役されたときは、携行する温度計で必ず温度を測定する」「問題あれば、直ちに作業変更を申し入れる」「実態は必ず分会三役に報告する」「三役は関係職制に事実にもとずき抗議し、改善をはかる」など。